

## 小中学生におけるメンタルヘルスに対するソーシャルサポートの横断的効果

村山 恭朗  
(神戸学院大学人文学部)

伊藤 大幸  
(浜松医科大学子どもこころの発達研究センター)

大嶽 さと子  
(名古屋女子大学短期大学部)

片桐 正敏  
(北海道教育大学旭川校)

浜田 恵  
(浜松医科大学子どもこころの発達研究センター)

中島 俊思  
(佐賀大学学生支援室)

上宮 愛  
(名古屋大学大学院環境学研究所)

野村 和代  
(浜松医科大学子どもこころの発達研究センター)

高柳 伸哉  
(愛知東邦大学人間学部)

明翫 光宜  
(中京大学心理学部)

辻井 正次  
(中京大学現代社会学部)

ソーシャルサポートは児童生徒のメンタルヘルスを維持する要因の一つと指摘されている。本研究は、一市内の全小中学校の高学年児童(4~6年生)と中学生( $n=5,223$ )を対象として、メンタルヘルス問題(抑うつ症状と攻撃性)に対するソーシャルサポートの横断的効果を検証した。属性(性別と学年)およびストレスを統制した一般線形モデルによる分析の結果、友人および大人からのソーシャルサポートを知覚する児童生徒ほど抑うつ症状が低いことが示された。また男子よりも女子でサポートと抑うつ症状の関連が強かった。攻撃性については、友人からのサポートは負の効果を示したが、その効果は非常に低いものであった。大人からのサポートは攻撃性に有意な効果を示さなかった。ソーシャルサポートの性差を検証したところ、いずれのソーシャルサポートも女子で高かった。学年の影響については、学年の上昇に伴って、友人からのサポートは増大する一方で、大人からのサポートは減少することが示された。

【キーワード】 ソーシャルサポート, 小中学生, 抑うつ症状, 攻撃性, メンタルヘルス

### 問題と目的

小中学生におけるメンタルヘルスの問題が懸念されている。メンタルヘルスの問題は内在化問題と外在化問題に大別される。抑うつ症状は主要な内在化問題であり、小学校高学年児童の12%、中学生の23%が抑うつ状態にあると報告されている(傳田ほか, 2004; 佐藤ほか, 2006)。一方、主要な外在化問題として攻撃性が挙げられ(Liu, 2004), 3%前後の児童生徒(男子4.1%, 女子2.8%)が強い攻撃性を示すと報告されている(伊藤ほか, 2010)。抑うつ症状や攻撃性は不登校, 非行, 自傷行為のリスク要因(望月ほか, 2014; 大嶽ほか, 2012; 高柳ほか, 2012a)のみならず, 成人期以降の精神疾患の発症を予測する要因(Fergusson, Horwood, Ridder, & Beautrais, 2005; Himle, Baser, Taylor, Campbell, & Jackson, 2009)であることから, 児童生徒が健全で安定した生活を形成するうえでメンタルヘルスは重要な変数といえる。

児童生徒のメンタルヘルスを維持する要因の一つとし

て, ソーシャルサポートが指摘されている。ソーシャルサポートとは個人的, 社会的, 家族的な対人ネットワークを指す(Sarason, Sarason, & Pierce, 1990)。ソーシャルサポートは社会的包絡(社会的ネットワークの大きさや人間関係の質), 知覚されたサポート(他者からのサポートについての認知的評価), 実行されたサポート(他者から受けたサポート)の3次元に分類される(Barbera, 1986)が, 児童生徒の場合, 社会的ネットワークや実行サポートは限定されるため, 知覚されたサポートが重要であると指摘されている(嶋田・岡安・坂野, 1993)。さらに, 知覚されたサポートはメンタルヘルスとの関連が最も強いことも報告されている(Linden, 2005)。以上の点を考慮し, 小学校高学年児童(4~6年生; 以下, 小学生)と中学生を対象とする本研究では, 知覚されたソーシャルサポートを扱う。

### ソーシャルサポートとメンタルヘルスの関連

中高生を対象とした先行研究では, 大人(親および教師)や友人からのソーシャルサポートを知覚する生徒ほど抑うつ症状が弱いことが示されている(e.g., Jackson

& Warren, 2000)。国内では、ソーシャルサポートと抑うつ症状の関連はあまり検証されていない。抑うつ症状と類似する変数を測定した研究として、小中学生を対象とした調査では、父親からのサポートが高い女子生徒ほどストレス反応の一つである「抑うつ・不安」が低いこと(岡安・嶋田・坂野, 1993)、ソーシャルサポートが高い児童ほど絶望感が低いこと(森・堀野, 1992)が見出されている。

攻撃性や外在化問題についても同様に、ソーシャルサポートとの関連が報告されている。ソーシャルサポートが高い生徒ほど攻撃性の一要素である敵意が低いこと(Hamama & Ronen-Shenhav, 2012)、大人からのサポートが低い生徒ほどいじめ加害行為の頻度が高いこと(Eskisu, 2014)が見出されている。国内では、両親からのサポートが高い中学生ほどストレス反応の「不機嫌・怒り」が低い、友人からのサポートにはそのような効果がないと示されている(岡安ほか, 1993)。しかし、これを除き、国内ではソーシャルサポートと攻撃性の関連についての知見はほとんど見られない。

#### ソーシャルサポートにおける性別・学年の影響

性差に関する国内研究を概観すると、父親からのサポートを除き、男子生徒よりも女子生徒でソーシャルサポートが知覚されやすいこと(細田・田嶋, 2009; 岡安ほか, 1993)、サポート源に関係なく、男子児童よりも女子児童はソーシャルサポートをより知覚しやすいこと(森・堀野, 1992; 嶋田ほか, 1993)が報告されている。一方、欧米の調査では、国内の知見と異なり、ソーシャルサポートの性差は確認されていない(Danielsen, Sandal, Hetland, & Wold, 2009; Nilsen, Karevold, Roysamb, Gustavson, & Mathiesen, 2013; Winefield, Delfabbro, Winefield, Plueckhahn, & Malvaso, 2015)。国内研究の多くは欧米の調査と比べ対象者数の面で小規模であることを踏まえ、大規模調査によって国内の児童生徒におけるソーシャルサポートの性差を再検証する必要がある。

学年の影響に関しては一貫した知見は示されていない。小学生を対象とした調査では、学年の上昇に伴い友人からのサポートが増大するという報告(森・堀野, 1992)もあるが、変化しないと示す報告(嶋田ほか, 1993)もある。また大人からのサポートについても一貫した知見は示されておらず、学年の影響は認められていないという報告(森・堀野, 1992)、4・5年生よりも6年生で低いと示す報告(嶋田ほか, 1993)がある。中学生を対象とした調査では、学年に伴い友人からのサポートは増大するが、大人からのサポートは減少すると示す報告(岡安ほか, 1993)、友人からのサポートは学年が上昇しても変化しないが大人からのサポートは種類によって増大もしくは減少するという報告(細田・田嶋,

2009)がある。このようにソーシャルサポートと学年の関連についての知見は一貫していない。しかし、ソーシャルサポートと学年の関連に関するこれまでの調査は小学生または中学生のどちらかを対象としている。それゆえ、児童生徒におけるソーシャルサポートと学年段階の関連について十分な検証がなされたとは言い難い。

以上のように、児童生徒が健全なメンタルヘルスを維持するうえで、ソーシャルサポートは重要な変数の一つであり、ソーシャルサポートの向上を図ることで、児童生徒のメンタルヘルスを改善・維持できると理解される。しかし、これまでの国内研究を鑑みると、ソーシャルサポートとメンタルヘルスの関連についての知見は十分ではない。大規模調査や小学生と中学生の双方を対象とした調査がないことから、ソーシャルサポートと性別および学年の関連に関する知見も十分とは言えない状況にある。どの学年段階の児童生徒に対してソーシャルサポートの向上が効果的であるか等の実証的知見の欠如は、ソーシャルサポートの向上を図る予防的介入や環境調整を実施するうえで大きな障害になり得る。そこで、本研究は一市内のすべての小中学校に在籍する小学生と中学生を対象として、ソーシャルサポートと抑うつ症状および攻撃性、性別、学年の関連を検証することを目的とする。

既存するソーシャルサポート尺度の項目(例えば「あなたのことを大切にしてくれる」、岡安ほか, 1993)は、一見すると、対人ストレスに関する項目の意味内容を逆転した形(例えば、「友だちに無視される」や「先生に嫌われていると感じる」、伊藤ほか, 2014)である。これを踏まえ、ストレスとは独立したソーシャルサポートのメンタルヘルスへの効果を検証するため、本研究では共変量としてストレスを分析モデルに投入する。

#### 本研究の仮説

これまでに得られている児童生徒におけるソーシャルサポートに関する知見を踏まえ、本研究では以下の仮説が立てられた。

1. 友人および大人からのソーシャルサポートが少ない児童生徒ほど、メンタルヘルスの問題が顕著である。
2. ソーシャルサポート(友人および大人)は、男子よりも女子のほうが高い。

## 方 法

#### 調査協力者

本研究は継続中のコホート研究の一部である。このコホート研究では、児童青年のメンタルヘルスと問題行動のメカニズムを明らかにすることを目的として、中部地域に位置する中規模都市の全保育所および全公立小中学校(小学校9校、中学校4校)を対象とした悉皆調査を

Table 1 調査協力者の内訳

| 学年 | 男子    | 女子    | 合計    |
|----|-------|-------|-------|
| 小4 | 489   | 427   | 916   |
| 小5 | 463   | 457   | 920   |
| 小6 | 490   | 440   | 930   |
| 中1 | 429   | 406   | 835   |
| 中2 | 409   | 431   | 840   |
| 中3 | 415   | 367   | 782   |
| 合計 | 2,695 | 2,528 | 5,223 |

年1回実施している。同市は大都市への通勤可能圏内であると同時に、工業、農業が盛んであり、都市で勤務する家庭や、地方型の勤務家庭など、多様な社会経済的状態の家庭が含まれている。本研究では、2012年度の調査で得られた小学4年生から中学3年生までの計5,223名のデータを分析に使用した。本調査協力者は全在籍児童生徒の97.8%（有効回答率）であった。調査協力者の内訳をTable 1に示す。

#### 調査材料

**ソーシャルサポート** 国内においては、小学生と中学生のどちらに対しても適用可能であるソーシャルサポートの自己記入式の評定尺度がない。そのため、中学生用SESS (Scale of Expectancy for Social Support; 岡安ほか, 1993), Multidimensional Scale of Perceived Social Support (MSPSS; Zimet, Dahlem, Zimet, & Farley, 1988), Inventory of Socially Supportive Behaviors (ISSB; Barrera, Sandler, & Ramsay, 1981), Child and Adolescent Social Support Scale (CASSS; Malecki, Demaray, & Elliot, 2000)などを参考に、自己記入式の小中学生用ソーシャルサポート尺度を作成した。児童生徒が日常生活において接触する頻度の高い「友人」と、保護者や教師を含む「周囲の大人」<sup>1)</sup>という2つのサポート源からのソーシャルサポートに関する認知を各6項目（計12項目）で測定する形式とした（例：あなたの友だちは、あなたが助けてほしいときに力になってくれますか）。回答形式は4件法（1：まったくあてはまらないー4：とてもよくあてはまる）である。

なお、先行研究の中には、ソーシャルサポートを機能面から複数の種類（情緒的、道具的、情動的など）に分類するものもあるが（Schaefer, Coyne, & Lazarus, 1981）、近年の研究では、機能面よりもサポート源に基づく分類を採用する研究が大多数を占めており（Chu, Saucier, & Hafner, 2010; Yalcin, 2015）、実証的にもサポート源内での1因子性を報告する研究が多い（岡安ほか, 1993）。こうした状況を踏まえ、本研究でも機能面

による分類は想定せず、サポート源ごとに1因子6項目で測定を行う形式を採用した。ただし、尺度としての領域代表性（内容的妥当性の一種であり、尺度を構成する項目群が測定しようとする領域を万遍なくカバーしているかを意味する）を考慮し、各サポート源の下位尺度には情緒的サポート、道具的サポート、情動的サポートのそれぞれに該当する内容を含むように項目を作成した。

**ストレッサー** 伊藤ほか（2014）によって作成された小中学生用社会的不適応尺度を使用した。当尺度は「友人関係」、「学業」、「教師関係」、「家族関係」の4領域における不適応感について各4項目（計16項目）で評定を行う自己記入式の尺度（3件法）である。友人関係問題、親の養育行動、学業成績、抑うつ症状、攻撃性などの外在基準との関連によって妥当性が検証されている（伊藤ほか, 2014）。

**抑うつ症状** Birlleson Depression Self-Rating Scale for Children (DSRS-C) 日本語版（村田・清水・森・大島, 1996）の短縮版（並川ほか, 2011）を用いた。DSRS-C短縮版は、「抑うつ気分」、「活動性および楽しみの減退」の2下位尺度、9項目から構成される自己記入式の尺度（3件法）であり、オリジナルのDSRS-Cと $r=.92$ の相関を持つことが示されている。またDSRS-Cは特性不安（伊藤ほか, 2010）、自傷行為（高柳ほか, 2012b）、不登校（高柳ほか, 2012a）などの内在化問題との関連から妥当性が確認されている。

**攻撃性** Buss-Perry Aggression Questionnaireの日本語版であるHostility-Aggression Questionnaire for Children (HAQ-C; 坂井ほか, 2000)の短縮版を使用した。HAQ-C短縮版は、HAQ-Cの「身体的攻撃」、「短気」、「敵意」の3下位尺度から抽出した8項目によって構成される4件法の尺度であり、オリジナルのHAQ-Cと $.91$ の相関を有する。HAQ-Cは、いじめ加害（村山ほか, 2015）、非行（望月ほか, 2014）などの外在化問題との関連から妥当性が検証されている。なお、

1) 国内の先行研究（e.g., 石毛・無藤, 2005; 森・堀野, 1992）では、周囲の大人から受けるソーシャルサポートを評定するために、親（父親、母親）や教師のようにサポート源を分類している。しかし、近年では、半数以上の小中学生は塾や習い事を利用していること（ベネッセ教育総合研究所, 2007）、児童の保護者が学校活動（登下校時における交通整理など）に日常的に関与していること、ひとり親家庭が増加し他の世帯員と同居する割合も増大していること（厚生労働省, 2015; 西, 2012）等を踏まえると、多くの小中学生は母親、父親、学校の教師のみならず、周囲にいる多種多様な大人からソーシャルサポートを得ていると考えられる。このような児童生徒を取り巻く社会的環境を鑑み、多種多様な「大人」を細分化しソーシャルサポートを評定する尺度を開発する場合には、その尺度の複雑性が著しく高まり、その汎用性が損なわれる恐れが多分にある。このため、本研究では、大人からのソーシャルサポートの評定に関して、母親、父親、教師のようにサポート源を特定せずに「周囲の大人」として包含する形式を採用した。

HAQ-Cは小学生用に開発された尺度であるが、年齢の近接する中学生にも適用可能であることが確かめられている(伊藤ほか, 2010)。

### 手続き

学級担任を介して質問紙を配布し、児童生徒に回答を求めた。本研究は、浜松医科大学と調査対象市の間で締結された調査と支援に関する協定に基づいて実施された。調査の実施にあたり、対象校の児童生徒の保護者に対して説明文書を配布し、研究に参加しないことによる不利益は生じないことを説明したうえで、文書による意思表示によって研究への参加を辞退できる旨を周知した。本研究の手続きは、浜松医科大学「医の倫理委員会」の審査と承認を受けた。すべての統計解析は、Mplus 7.31 (Muthén & Muthén) を用いた。

## 結 果

### 確認的因子分析

独自に作成した小中学生用ソーシャルサポート尺度について、確認的因子分析を用いて因子的妥当性を検証した。「友人からのサポート」と「大人からのサポート」の2因子に対して、各6項目が負荷する因子モデルを仮定した。年齢層の異なる小学生と中学生において、同一の因子構造による測定がなされているか否かを確認するため、多母集団解析による検証を行った。なお、モデルとデータの適合を示す各種の適合度指標に関する経験的基準として、CFIは.90以上、RMSEAは.06以下、SRMRは.08以下の数値が良好な適合を示すという基準が提唱されている(Bentler & Bonnet, 1980; Hu & Bentler, 1998)。

まず、小学生と中学生のデータについて個別に分析を行ったところ、小・中学生のいずれにおいても経験的基準を上回る適合度が得られた(Table 2)。このことから、想定した2因子モデルがいずれの学年集団にも適合していることが示され、小中学生用ソーシャルサポート尺度の因子的妥当性が支持された。次に、小学生と中学生のデータについて、因子負荷量に等値制約を置かず、因子の配置(どの項目がどの因子に負荷するか)のみを同一にした配置不変モデルを適用して多母集団解析を行った結果、経験的基準を上回る適合度が得られた(Table 2)。最後に、小・中学生の間ですべての項目の因子負荷量に等値制約を課した測定不変モデルを適用したところ、配置不変モデルに比べ、パラメータ数の減少にも関わらずCFIやSRMRでは大幅な悪化が見られず、節約性を重視したRMSEAやBICでは数値の改善が見られた(Table 2)。このことから、節約性と適合度のバランスにおいて、測定不変モデルが配置不変モデルよりも優れていることが示され、小中学生用ソーシャルサポート尺度の因子構造が小・中学生の間で保たれていること

**Table 2** 確認的因子分析(多母集団解析)における各モデルの適合度指標

| モデル     | $\chi^2$ | df  | RMSEA | CFI  | SRMR | BIC      |
|---------|----------|-----|-------|------|------|----------|
| 個別モデル   |          |     |       |      |      |          |
| 小学生     | 292.2    | 53  | .034  | .985 | .020 |          |
| 中学生     | 204.5    | 53  | .032  | .986 | .018 |          |
| 配置不変モデル | 489.8    | 106 | .033  | .986 | .019 | 144823.9 |
| 測定不変モデル | 514.8    | 116 | .032  | .985 | .023 | 144753.8 |

が確認された。

測定不変モデルにおける各項目の因子負荷量をTable 3に示した。いずれの項目も.70を超える高い負荷量を示しており、各因子の指標として十分に機能していることが見て取れる。因子間相関は.50程度の値を示しており、両因子には比較的強い相関があるものの、一定の独立性を保っていることが示唆されている。尺度の内的整合性を示す $\alpha$ 係数は「友人からのサポート」で $\alpha=.907$ 、「大人からのサポート」で $\alpha=.921$ であり、十分な値が示された。

### 性別・学年による差

小中学生用ソーシャルサポート尺度とその他の尺度の性別・学年ごとの平均値と標準偏差をTable 4に示した。小中学生用ソーシャルサポート尺度の2下位尺度における性別・学年差について、一般線形モデル(多項式回帰)を用いて検証した。具体的には、各下位尺度得点について、性別(男子を0, 女子を1とした)、学年、学年の二乗の各主効果に加え、性別×学年、性別×学年の二乗の交互作用を独立変数として分析を行った。多重共線性を避けるため、学年はあらかじめ中央化したうえで分析に使用した。なお、「学年の二乗」の項は学年の非線形効果(曲線効果)を検討するために投入した。

「友人からのサポート」については、性別( $B=.231, p<.001$ )、学年( $B=.034, p=.013$ )、学年の二乗( $B=-.058, p<.001$ )の各主効果が有意であり、交互作用はいずれも有意でなかった(性別×学年: $B=.013, p=.329$ ; 性別×学年の二乗: $B=.023, p=.130$ )。このことから、「友人からのサポート」は男子よりも女子で高く、学年とともに上昇するが、徐々に上昇が緩やかになることが示された。

「大人からのサポート」については、性別( $B=.120, p<.001$ )、学年( $B=-.219, p<.001$ )、学年の二乗( $B=-.071, p<.001$ )の各主効果に加え、性別×学年( $B=-.045, p=.001$ )の交互作用が有意であったが、性別×学年の二乗の交互作用は有意でなかった( $B=.026, p=.094$ )。このことから、「大人からのサポート」

Table 3 確認的因子分析（測定不変モデル）における因子負荷量

|  | 負荷量 <sup>a</sup><br>(小学生 / 中学生) |
|--|---------------------------------|
| 友人からのサポート                                    |                                 |
| 1. あなたの友だちは、あなたが落ち込んでいると元気づけてくれますか           | .742/.755                       |
| 2. あなたの友だちは、あなたのことをよくほめてくれますか                | .704/.700                       |
| 3. あなたには、何か困っているときにどうしたらいいか教えてくれる友だちがいますか    | .754/.783                       |
| 4. あなたの友だちは、あなたが何か失敗しても助けてくれますか              | .833/.843                       |
| 5. あなたの友だちは、あなたが助けてほしいときに力になってくれますか          | .825/.853                       |
| 6. ひとりではできないことがあった時に、あなたの友だちは手伝ってくれますか       | .770/.820                       |
| 大人からのサポート                                    |                                 |
| 7. あなたのまわりの大人の人は、あなたが落ち込んでいると元気づけてくれますか      | .750/.799                       |
| 8. あなたのまわりの大人の人は、あなたのことをよくほめてくれますか           | .726/.761                       |
| 9. あなたのまわりには、何か困っているときにどうしたらいいか教えてくれる大人がいますか | .796/.826                       |
| 10. あなたのまわりの大人の人は、あなたが何か失敗しても助けてくれますか        | .847/.865                       |
| 11. あなたのまわりの大人の人は、あなたが助けてほしいときに力になってくれますか    | .835/.877                       |
| 12. ひとりではできないことがあった時に、あなたのまわりの大人の人は手伝ってくれますか | .776/.831                       |
|  | 因子間相関 .524/.535                 |

<sup>a</sup> 標準化係数。非標準化係数上で等値制約を課しているため、各群の項目得点の分散や因子分散によって標準化係数は異なる。

は男子より女子で高く、学年とともに低下し、その低下は徐々に顕著になること、また、男子よりも女子において低下の程度が大きいことが示された。

#### ソーシャルサポートと他の変数の相関

ソーシャルサポート、ストレス、抑うつ症状、攻撃性の相関係数（Pearson の積率相関）を Table 5 に示した。ソーシャルサポートの各下位尺度は、ストレスの全下位尺度、抑うつ症状、攻撃性と有意な負の相関を示した。ストレスとの相関では、「友人関係」に対して「友人からのサポート」が相対的に高い値を示したのに対し、「教師関係」、「家族関係」、「学業」に関しては「大人からのサポート」が比較的高い値を示した。一方、抑うつ症状や攻撃性との相関では、ソーシャルサポートのいずれの下位尺度も同程度の相関を示した。ストレスの各下位尺度は、いずれも抑うつ症状、攻撃性と有意な正の相関を示した。抑うつ症状との相関は「友人関係」や「家族関係」が比較的高い値を示し、攻撃性との相関は「友人関係」、「教師関係」、「家族関係」が比較的高い値を示した。

#### ソーシャルサポートによるメンタルヘルスの予測

ソーシャルサポートが他の交絡要因（性別、学年、ストレス）とは独立にメンタルヘルスを予測するか否かを検証するため、一般線形モデルによる分析を行った。具体的には、抑うつ症状、攻撃性のそれぞれについ

て、性別（男子を 0、女子を 1 とした）、学年、学年の二乗、ストレス（4 下位尺度）、ソーシャルサポート（2 下位尺度）の各主効果に加え、性別および学年とストレスおよびソーシャルサポートの交互作用を独立変数として分析を行った。多重共線性を避けるため、学年はあらかじめ中央化したうえで分析に使用した。また、説明率の変化を検討するため、性別・学年のみを投入したステップ 1、ストレスの主効果を加えたステップ 2、ソーシャルサポートの主効果を加えたステップ 3、交互作用項を加えたステップ 4 の 4 段階に分けて分析を行った。ただし、モデルの儉約性のため、有意でなかった交互作用項は  $p$  値が高い（有意性が低い）項から順次除外して再分析を行い、最終的に有意であった項のみを残した。

抑うつ症状に対する一般線形モデルの結果を Table 6 に示した。いずれのステップも有意な説明率の上昇を示したため、ステップ 4 を最終モデルとして採用した。性別および学年の主効果が有意であり、男子よりも女子で、また、学年が高いほど、抑うつ症状が高いことが示された。ストレスについては、「友人関係」、「家族関係」、「学業」が抑うつ症状に正の主効果を示した。ソーシャルサポートについては、「友人からのサポート」と「大人からのサポート」のいずれも、抑うつ症状に負の効果を示した。交互作用については、(1) 男子よりも

Table 4 各尺度の性別・学年ごとの平均値と標準偏差

|    | ソーシャルサポート |      |       |      | ストレッサー |      |      |      |      |      |      |      | 抑うつ症状 |      | 攻撃性   |      |
|----|-----------|------|-------|------|--------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|------|
|    | 友人        |      | 大人    |      | 友人関係   |      | 教師関係 |      | 家族関係 |      | 学業   |      | M     | SD   | M     | SD   |
|    | M         | SD   | M     | SD   | M      | SD   | M    | SD   | M    | SD   | M    | SD   |       |      |       |      |
| 男子 |           |      |       |      |        |      |      |      |      |      |      |      |       |      |       |      |
| 小4 | 17.42     | 4.45 | 18.62 | 4.42 | 1.16   | 1.94 | 1.24 | 1.62 | 2.01 | 1.69 | 3.91 | 2.02 | 4.07  | 2.82 | 17.60 | 5.98 |
| 小5 | 17.43     | 4.22 | 18.51 | 4.46 | 0.98   | 1.76 | 1.25 | 1.50 | 1.71 | 1.68 | 3.96 | 2.15 | 3.90  | 2.64 | 17.25 | 5.60 |
| 小6 | 18.31     | 3.85 | 18.72 | 4.05 | 0.75   | 1.54 | 1.14 | 1.53 | 1.79 | 1.73 | 3.99 | 2.11 | 3.89  | 2.62 | 18.00 | 5.19 |
| 中1 | 17.79     | 3.67 | 17.75 | 3.98 | 0.61   | 1.46 | 0.92 | 1.44 | 1.39 | 1.69 | 4.57 | 1.92 | 4.40  | 2.82 | 16.40 | 5.00 |
| 中2 | 18.09     | 3.52 | 17.46 | 4.06 | 0.49   | 1.25 | 0.97 | 1.51 | 1.39 | 1.63 | 4.84 | 1.86 | 4.41  | 2.74 | 16.71 | 5.00 |
| 中3 | 17.33     | 3.66 | 16.14 | 4.15 | 0.57   | 1.30 | 1.12 | 1.66 | 1.62 | 1.75 | 5.03 | 1.92 | 5.11  | 3.17 | 16.53 | 4.36 |
| 全体 | 17.40     | 4.13 | 17.89 | 4.32 | 0.77   | 1.59 | 1.11 | 1.55 | 1.66 | 1.71 | 4.35 | 2.05 | 4.13  | 2.79 | 17.12 | 5.26 |
| 女子 |           |      |       |      |        |      |      |      |      |      |      |      |       |      |       |      |
| 小4 | 19.42     | 3.83 | 20.43 | 3.73 | 0.69   | 1.39 | 0.63 | 1.07 | 1.67 | 1.50 | 3.51 | 1.83 | 4.36  | 2.89 | 15.04 | 5.15 |
| 小5 | 19.45     | 3.83 | 20.30 | 3.68 | 0.67   | 1.45 | 0.65 | 1.20 | 1.47 | 1.53 | 3.75 | 1.98 | 4.15  | 2.91 | 15.13 | 4.89 |
| 小6 | 19.92     | 3.63 | 20.01 | 3.77 | 0.52   | 1.32 | 0.63 | 1.21 | 1.52 | 1.59 | 3.92 | 1.90 | 4.56  | 3.20 | 15.89 | 4.99 |
| 中1 | 19.95     | 3.74 | 18.75 | 4.32 | 0.65   | 1.46 | 0.66 | 1.18 | 1.58 | 1.75 | 4.73 | 1.84 | 4.76  | 3.15 | 16.23 | 5.20 |
| 中2 | 19.93     | 3.47 | 17.69 | 4.45 | 0.53   | 1.26 | 1.14 | 1.67 | 1.76 | 1.90 | 5.25 | 2.00 | 5.35  | 3.38 | 15.55 | 4.68 |
| 中3 | 19.83     | 3.38 | 17.49 | 4.40 | 0.38   | 1.02 | 0.73 | 1.22 | 1.54 | 1.82 | 5.23 | 1.78 | 5.34  | 3.20 | 15.26 | 4.56 |
| 全体 | 19.34     | 3.83 | 19.18 | 4.16 | 0.58   | 1.33 | 0.74 | 1.29 | 1.59 | 1.69 | 4.37 | 2.02 | 4.52  | 3.05 | 15.51 | 4.93 |
| 全体 |           |      |       |      |        |      |      |      |      |      |      |      |       |      |       |      |
| 小4 | 18.36     | 4.29 | 19.47 | 4.21 | 0.94   | 1.72 | 0.95 | 1.42 | 1.85 | 1.61 | 3.72 | 1.94 | 4.20  | 2.85 | 16.40 | 5.74 |
| 小5 | 18.44     | 4.15 | 19.40 | 4.18 | 0.82   | 1.62 | 0.95 | 1.39 | 1.59 | 1.61 | 3.86 | 2.07 | 4.02  | 2.78 | 16.19 | 5.36 |
| 小6 | 19.07     | 3.83 | 19.33 | 3.97 | 0.64   | 1.45 | 0.90 | 1.41 | 1.66 | 1.67 | 3.96 | 2.02 | 4.21  | 2.93 | 17.01 | 5.20 |
| 中1 | 18.84     | 3.85 | 18.24 | 4.18 | 0.63   | 1.46 | 0.79 | 1.33 | 1.48 | 1.72 | 4.65 | 1.88 | 4.58  | 2.99 | 16.32 | 5.09 |
| 中2 | 19.03     | 3.61 | 17.58 | 4.26 | 0.51   | 1.25 | 1.06 | 1.59 | 1.58 | 1.78 | 5.05 | 1.94 | 4.90  | 3.12 | 16.11 | 4.87 |
| 中3 | 18.50     | 3.74 | 16.77 | 4.32 | 0.48   | 1.18 | 0.94 | 1.48 | 1.58 | 1.79 | 5.12 | 1.86 | 5.22  | 3.19 | 15.94 | 4.50 |
| 全体 | 18.35     | 4.10 | 18.53 | 4.29 | 0.68   | 1.47 | 0.93 | 1.44 | 1.63 | 1.70 | 4.36 | 2.04 | 4.32  | 2.92 | 16.34 | 5.17 |

女子で家族関係の（抑うつ症状への）効果が強いこと、(2) 男子よりも女子で友人からのサポートの効果が強いこと、(3) 学年が上がるほど友人関係の効果が強いこと、(4) 学年が上がるほど家族関係の効果が弱いこと、(5) 学年が上がるほど友人関係サポートの効果が強いこと、(6) 学年が上がるほど大人からのサポートの効果が強いことが示された。また、2つの高次の交互作用について下位検定を行った結果、(7) (4) の交互作用が男子でのみ見られること、(8) (6) の交互作用が男子でのみ見られることが示された。

攻撃性に対する一般線形モデルの結果を Table 7 に示した。いずれのステップも有意な説明率の上昇を示したため、ステップ4を最終モデルとして採用した。性別、

学年、学年の二乗の主効果が有意であり、女子よりも男子で、また学年が低いほど、攻撃性が高いことが示された。ストレッサーについては、すべての下位尺度が攻撃性に正の主効果を示した。ソーシャルサポートについては、「友人からのサポート」のみが攻撃性に負の主効果を示した。交互作用については、(1) 男子よりも女子で友人関係の（攻撃性への）効果が弱いこと、(2) 男子よりも女子で大人からのサポートの効果が強いこと（女子でのみ大人からのサポートの負の効果が有意）、(3) 学年が高いほど教師関係の効果が弱いことが示された。

## 考 察

本研究は、一市内にある全小中学校の小学生から中学

**Table 5** 各尺度得点間の相関

|           | ソーシャルサポート |       | ストレッサー |      |      |      | 抑うつ症状 | 攻撃性 |
|-----------|-----------|-------|--------|------|------|------|-------|-----|
|           | 友人        | 大人    | 友人関係   | 教師関係 | 家族関係 | 学業   |       |     |
| ソーシャルサポート |           |       |        |      |      |      |       |     |
| 友人        | —         |       |        |      |      |      |       |     |
| 大人        | .499      |       |        |      |      |      |       |     |
| ストレッサー    |           |       |        |      |      |      |       |     |
| 友人関係      | -.340     | -.190 | —      |      |      |      |       |     |
| 教師関係      | -.197     | -.301 | .349   | —    |      |      |       |     |
| 家族関係      | -.223     | -.381 | .431   | .416 | —    |      |       |     |
| 学業        | -.150     | -.309 | .190   | .323 | .354 | —    |       |     |
| 抑うつ症状     | -.450     | -.436 | .403   | .246 | .402 | .298 | —     |     |
| 攻撃性       | -.235     | -.234 | .311   | .311 | .347 | .238 | .291  | —   |

注. 係数はすべて0.1%水準で有意。

**Table 6** 抑うつ症状を従属変数とする一般線形モデルの結果

|                 | B        |          |          |          |
|-----------------|----------|----------|----------|----------|
|                 | ステップ1    | ステップ2    | ステップ3    | ステップ4    |
| 切片              | -.189*** | -.204*** | -.261*** | -.201*** |
| 性別 (基準: 男子)     | .143***  | .194***  | .377***  | .405***  |
| 学年              | .035*    | .057***  | .055***  | .058***  |
| 学年二乗            | .021***  | .013**   | .005     | .006     |
| ストレッサー          |          |          |          |          |
| 友人関係            |          | .293***  | .208***  | .218***  |
| 教師関係            |          | .021     | -.007    | -.002    |
| 家族関係            |          | .239***  | .170***  | .110***  |
| 学業              |          | .113***  | .073***  | .078***  |
| ソーシャルサポート       |          |          |          |          |
| 友人 S            |          |          | -.301*** | -.265*** |
| 大人 S            |          |          | -.167*** | -.166*** |
| 交互作用            |          |          |          |          |
| 性別×家族関係         |          |          |          | .114***  |
| 性別×友人 S         |          |          |          | -.085*** |
| 学年×友人関係         |          |          |          | .020**   |
| 学年×家族関係         |          |          |          | -.027**  |
| 学年×友人 S         |          |          |          | -.029*** |
| 学年×大人 S         |          |          |          | -.033**  |
| 性別×学年×家族関係      |          |          |          | .029*    |
| 性別×学年×大人 S      |          |          |          | .050***  |
| R <sup>2</sup>  | .026***  | .282***  | .411***  | .424***  |
| ΔR <sup>2</sup> |          | .256***  | .129***  | .013***  |

注. 表中のBは非標準化偏回帰係数。ただし、抑うつ症状、ストレッサー、ソーシャルサポートは標準化し、学年は中央化した上で分析に投入した。

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

Table 7 攻撃性を従属変数とする一般線形モデルの結果

|                 | B        |          |          |          |
|-----------------|----------|----------|----------|----------|
|                 | ステップ1    | ステップ2    | ステップ3    | ステップ4    |
| 切片              | .203***  | .196***  | .183***  | .180***  |
| 性別 (基準: 男子)     | -.315*** | -.258*** | -.216*** | -.204*** |
| 学年              | .016     | .023     | .022     | -.030*** |
| 学年二乗            | -.016**  | -.023*** | -.025*** | -.025*** |
| ストレッサー          |          |          |          |          |
| 友人関係            |          | .148***  | .129***  | .158***  |
| 教師関係            |          | .133***  | .126***  | .132***  |
| 家族関係            |          | .185***  | .168***  | .163***  |
| 学業              |          | .117***  | .107***  | .103***  |
| ソーシャルサポート       |          |          |          |          |
| 友人S             |          |          | -.067*** | -.071*** |
| 大人S             |          |          | -.042*   | .012     |
| 交互作用            |          |          |          |          |
| 性別×友人関係         |          |          |          | -.081**  |
| 性別×大人S          |          |          |          | -.123*** |
| 学年×教師関係         |          |          |          | -.039*** |
| R <sup>2</sup>  | .027***  | .203***  | .209***  | .218***  |
| ΔR <sup>2</sup> |          | .176***  | .006***  | .009***  |

注. 表中のBは非標準化偏回帰係数。ただし, 攻撃性, ストレッサー, ソーシャルサポートは標準化し, 学年は中央化した上で分析に投入した。

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

生を対象として, 抑うつ症状と攻撃性へのソーシャルサポートの横断的効果を検証し, 加えて学年および性別のソーシャルサポートへの影響を検証した。学年, 性別, ストレッサーを統制した一般線形モデルによる分析を行った結果, 友人からのサポートは抑うつ症状と攻撃性に対して, 大人からのサポートは抑うつ症状に対して負の効果を示した。さらに, 性別や学年段階の違いにより, ソーシャルサポートの程度に差があることが確認された。

#### 小中学生用ソーシャルサポート尺度の信頼性・妥当性

本研究では, 小中学生に適用可能なソーシャルサポート尺度を作成した。友人および大人からのサポートの両下位尺度の内的整合性は経験的基準である $\alpha = .70$ を大きく上回り, 高い信頼性を備えていると判断される。また学年段階によらず本尺度の因子構造が安定していたことから, 小中学生のどちらに対しても本尺度の適用性の問題はないと示唆される。構成概念妥当性に関しては, 友人と大人からのサポートの間には正の関連(細田・田嶋, 2009; Nilsen et al., 2013), 抑うつ症状に対して負の効果(Schraedley, Gotlib, & Hayward, 1999; Winefield et al., 2015), 学業成績と正の関連(Robbins et al., 2004),

友人関係や学業ストレッサーと正の関連(Chen & Wei, 2013)を示すと報告されているが, 本研究はこれらと整合的であった。以上の諸点から, 小中学生用ソーシャルサポート尺度は高い信頼性と妥当性を備えているとともに, 小中学生に対して適用できる尺度であると理解される。

#### ソーシャルサポートによる抑うつ症状の予測

本研究では, 仮説通り, 友人および大人からのサポートが高い児童生徒ほど抑うつ症状が弱かった。この結果は, 国内外の複数の先行知見(e.g., Jackson & Warren, 2000)と一致する。さらに, 友人からのサポートと抑うつ症状の関連は男子よりも女子で強かった。これを支持するように, 小中高生を対象とした調査でも, 抑うつ症状に対するソーシャルサポートの効果は女子でより高いと示されている(Chen & Wei, 2013)。このような傾向は成人においても同様であり, 成人を対象とした縦断調査において, 女性においてのみ, ソーシャルサポートはうつ病発症を抑止する効果があると認められている(Schraedley et al., 1999)。本研究を含めたこれらの知見から, 小中学生や成人では, 女性は男性よりもソーシャルサポートと抑うつ症状の関連が強いことが理解され



る。

本研究では、高学年の児童生徒ほど抑うつ症状に対する友人サポートの効果が高かった。しかし、小学生を対象とした国内調査（森・堀野，1992）では、ソーシャルサポートの種類によって学年の影響は一貫していないが、学年の上昇に伴いソーシャルサポートと絶望感の相関係数は低くなると述べられている（森・堀野，1992）。本研究とこの先行研究が示した結果の違いは、従属変数の違い等で説明することもできるであろうが、思春期の子どもは友人関係の重要性を次第に高めること（Rubin, Bukowski, & Parker, 2006）を鑑みれば、本研究が示した結果は思春期の傾向と整合的であるといえる。

友人サポートほどではなかったが、大人からのサポートも抑うつ症状に負の効果を示した。これは先行研究（e.g., Jackson & Warren, 2000）と一致する。さらに、本研究では、高学年の男子ほど大人からのサポートと抑うつ症状の関連が強かった。これまでソーシャルサポート・性別・学年の交互作用を検証した研究はほとんど行われていないため、先行研究と比較することはできない。しかし、発達に伴い男子は女子と比べ大人に頼らない対人関係を形成しやすいこと（後藤・廣岡，2005）からすると、高学年の男子が大人からのサポートを知覚する場合には、女子よりもその効果が表れやすくなると思われる。今後、更なる検証が必要である。

#### ソーシャルサポートによる攻撃性の予測

友人からのサポートのみ攻撃性に対して負の効果を示したが、その効果は非常に弱いものであった。この結果は仮説を部分的に支持するものであるが、友人や大人からのサポートを知覚する生徒ほど、敵意や問題行動の頻度が低いと示すこれまでの報告（Eskisu, 2014; Hamama & Ronen-Shenhav, 2012）とは整合しない。欧米の児童生徒と比べ、国内の児童生徒は全般的に攻撃性が低い（Crystal et al., 1994）ため、ソーシャルサポートの効果は攻撃性には現れ難かったと思われる。

一方で、本研究では、大人サポートの効果には性差があり、大人からのサポートを知覚する女子ほど攻撃性が低かった。これに沿うように、女子生徒が両親からのサポートを知覚するほど不機嫌や怒りが抑えられると報告されている（岡安ほか，1993）。女子は男子よりも攻撃性が低いこと（伊藤ほか，2010）から、攻撃性が強い女子は集団のなかで目立つ存在になり、担任をはじめ周囲の大人はそのような女子に対して教育／支援的アプローチを提供する機会が多いと考えられる。孤独感が強い場合には、攻撃性が強まること（Leary, Twenge, & Quinlivan, 2006）を踏まえると、攻撃性が強い女子は大人からのサポートによって孤独感が緩和され、攻撃性の軽減が引き起こされた可能性がある。この点に関しては、今後より詳細な検証が必要である。

#### 性別・学年によるソーシャルサポートの差

ソーシャルサポートの性差に関して、国内外の知見は一貫していなかったが、本研究では、友人と大人からのサポートのどちらについても女子で高かった。これはこれまでの国内調査（細田・田嶋，2009；森・堀野，1992；岡安ほか，1993；嶋田ほか，1993）と一致するものであり、男子と比べ女子では友人や教師との関係が親密である（Coleman & Hendry, 1999）などの対人関係の性差とも整合する。また欧米での知見と本研究を含めた国内の知見は一致していないが、ソーシャルサポートの知覚はその国の文化が影響すること（Kim, Sherman, & Taylor, 2008）を勘案すれば、本研究と国外の知見が一致しないことも理解される。我が国と類似した集団主義文化が強い台湾における調査では、男子生徒と比べ女子生徒のソーシャルサポートがより高いと示されており（Chen & Wei, 2013）、本研究や他の国内調査と一致している。このことから、本研究を含め国内調査が示したソーシャルサポートの性差の一端には我が国の文化背景が影響している可能性もある。

友人からのサポートと学年の関連について、一貫した知見は示されていない。本研究では、友人からのサポートは学年の上昇に伴い増大するがその上昇は徐々に緩やかになること、大人からのサポートは学年の上昇に伴い減少するがその減少程度は次第に大きくなり、その程度は女子のほうが大きいことが示された。国内におけるこれまでの調査では、小学生から中学生を通じたソーシャルサポートと学年の関連は検証されていないことを踏まえると、本研究が示した結果の意義は大きい。学年上昇に伴う友人と大人からのサポートの変化が相反することは、思春期の子どもは大人の保護下から徐々に自立していき大人に対して反抗的な態度を示すようになること（安藤，2006；宮野，1984）、大人よりも友人関係の重要性が徐々に高まること（Rubin et al., 2006）などの思春期の傾向と整合する。また学年上昇に伴う大人からのサポートの減少程度には性差が見られたが、これは男子よりも女子は友人と情緒的で親密な関係を形成する傾向（Coleman & Hendry, 1999）が一因にあると思われる。

#### 臨床的示唆

本研究の結果、友人および大人からのサポートのどちらも抑うつ症状に対して負の効果を示した。特に、友人からのサポートについては、抑うつ症状の悪化を促すストレス（Lewinsohn, Hoberman, & Rosenbaum, 1988）よりも、抑うつ症状への効果が強かった。小中学生に対する抑うつ予防的介入の一部では、ストレスの低減を目的とし問題解決スキルの向上が焦点である（佐藤ほか，2009）が、ストレスを完全に除去することは不可能であることを踏まえると、ソーシャルサ

ポートの向上を図ることも重要な視点であると理解できる。さらに、ソーシャルサポートはメンタルヘルスの悪化のみならず、いじめや不登校を抑止する要因と示されていること(菊島, 2001; Williams, Connolly, Pepler, & Craig, 2005)を踏まえると、その重要性が一層理解される。国外調査であるが、大学新入生を対象とした心理教育とグループワークを組み合わせたプログラムによって、ソーシャルサポートが増大するのみならず、孤独感の緩和や学業成績が向上することが報告されている(Mattanah, Ayers, Brand, & Brooks, 2010; Mattanah, Brooks, Brand, Quimby, & Ayers, 2012)。今後、国内でも児童生徒を対象とするソーシャルサポートの介入プログラムの開発およびその効果測定が望まれる。

#### 今後の課題

本研究は横断データを用い、メンタルヘルス問題に対するソーシャルサポートの効果を検証した。一方で、高校生を対象とした介入研究では、認知行動療法的介入を通じた抑うつ症状の緩和によって、親からのサポートには効果を示さなかったものの、友人からのソーシャルサポートが改善したと報告されている(Stice, Rohde, Gau, Ochner, 2011)。このことから、各ソーシャルサポートと抑うつ症状の間には複雑な因果関係があると思われる。今後、縦断的調査によって検証することが望まれる。また本研究では、抑うつ症状と攻撃性という主要なメンタルヘルス問題を取りあげたが、ソーシャルサポートはレジリエンス、学校や生活への満足感などポジティブな変数との関連も指摘されている(Danielsen et al., 2009; 石毛・無藤, 2005)。このことから、メンタルヘルス問題に対するソーシャルサポートの効果の一部はポジティブな要因の増進を媒介する可能性もある。今後、ポジティブな変数も加え、縦断的調査が実施されることが期待される。

## 文 献

- 安藤朗子. (2006). 学童期における心の発達と健康. *母子保健情報*, *54*, 53-58.
- Barrera, M., Jr. (1986). Distinction between social support concepts, measures, and models. *American Journal of Community Psychology*, *14*, 413-445.
- Barrera, M., Sandler, I.M., & Ramsay, T.B. (1981). Preliminary development of a scale of social support: Studies on college students. *American Journal of Community Psychology*, *9*, 435-446.
- ベネッセ教育総合研究所. (2007). 第3回子育て生活基本調査報告書.
- Bentler, P.M. & Bonnet, D.G. (1980). Significance tests and goodness of fit in the analysis of covariance structures. *Psychological Bulletin*, *107*, 238-246.
- Chen, J.K., & Wei, H.S. (2013). School violence, social support and psychological health among Taiwanese junior high school students. *Child Abuse & Neglect*, *37*, 252-262.
- Chu, P.S., Saucier, D.A., & Hafner, E. (2010). Meta-analysis of the relationships between social support and well-being in children and adolescents. *Journal of Social & Clinical Psychology*, *29*, 624-645.
- Coleman, J., & Hendry, L. (1999). 青年期の本質 (白井利明・若松養亮・杉村和美・小林 亮・柏尾眞津子, 訳). 東京: ミネルヴァ書房. (Coleman, J., & Hendry, L. (1999). *The Nature of Adolescence* (3rd ed.). London: Routledge.)
- Crystal, D.S., Chen, C., Fuligni, A.J., Stevenson, H.W., Hsu, C.C., Ko, H.J., Kitamura, S., & Kimura, S. (1994). Psychological maladjustment and academic achievement: A cross-cultural study of Japanese, Chinese, and American high school students. *Child Development*, *65*, 738-753.
- Danielsen, A.G., Samdal, O., Hetland, J. & Wold, B. (2009). School-related social support and students' perceived life satisfaction. *The Journal of Educational Research*, *102*, 303-318.
- 傳田健三・賀古勇輝・佐々木幸哉・伊藤耕一・北川信樹・小山 司. (2004). 小・中学生の抑うつ状態に関する調査: Birleson 自己記入式抑うつ評価尺度(DSRSC)を用いて. *児童精神医学とその近接領域*, *45*, 424-436.
- Eskisu, M. (2014). The relationship between bullying, family functions and perceived social support among high school students. *Procedia-Social Sciences*, *159*, 492-496.
- Fergusson, D.M., Horwood, L.J., Ridder, E.M., & Beautrais, A.L. (2005). Subthreshold depression in adolescence and mental health outcomes in adulthood. *Archives General Psychiatry*, *62*, 66-72.
- 後藤安代・廣岡修一. (2005). 中学生が抱く「相談することに対する抵抗感」についての実態調査的研究. *三重大学教育学部付属教育実践総合センター紀要*, *25*, 77-84.
- Hamama, L., & Ronen-Shcnhav, A. (2012). Self-control, social support, and aggression among adolescents in divorced and two-parent families. *Children and Youth Services Review*, *34*, 1042-1049.
- Himle, J.A., Baser, R.E., Taylor, R.J., Campbell, R.D., & Jackson, J.S. (2009). Anxiety disorders among African Americans, blacks of Caribbean descent, and non-Hispanic whites in the United States. *Journal of Anxiety Dis-*

- order, 23, 578-590.
- 細田 絢・田嶋誠一. (2009). 中学生におけるソーシャルサポートと自己への肯定感に関する研究. *教育心理学研究*, 57, 309-323.
- Hu, L. & Bentler, P.M. (1998). Fit indices in covariance structure modeling: sensitivity to underparameterized model misspecification. *Psychological Methods*, 3, 424-453.
- 石毛みどり・無藤 隆. (2005). 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連: 受験期の学業場面に着目して. *教育心理学研究*, 53, 356-367.
- 伊藤大幸・神谷美里・吉橋由香・宮地泰士・野村香代・谷 伊織・辻井正次. (2010). 小中学生の攻撃性: 特性不安および抑うつとの関連からの検討. *精神医学*, 52, 489-497.
- 伊藤大幸・田中善大・村山恭朗・中島俊思・高柳伸哉・野田 航・望月直人・松本かおり・辻井正次. (2014). 小中学生用社会的不適応尺度の開発と構成概念妥当性の検証. *精神医学*, 56, 699-708.
- Jackson, Y., & Warren, J.S. (2000). Appraisal, social support, and life events: Predicting outcome behavior in school-age children. *Child Development*, 71, 1441-1457.
- 菊島勝也. (2001). 神経症的不登校におけるストレス体験とソーシャルサポート. *性格心理学研究*, 9, 144-145.
- Kim, H.S., Sherman, D.K., & Taylor, S.E. (2008). Culture and social support. *American Psychologist*, 63, 518-526.
- 厚生労働省. (2015). ひとり親家庭等の現状について. (<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000083324.pdf>) (2016年5月31日10時35分)
- Leary, M.R., Twenge, J.M., & Quinlivan, E. (2006). Interpersonal rejection as determinant of anger and aggression. *Personality and Social Psychology Review*, 10, 111-132.
- Lewinsohn, P.M., Hoberman, H.M., & Rosenbaum, M.A. (1988). A prospective study of risk factors for unipolar depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 97, 251-264.
- Linden, W. (2005). *Stress management: from basic science to better practice*. California: Sage Publications.
- Liu, J. (2004). Children externalizing behavior: Theory and implications. *Journal of Child and Adolescent Psychiatric Nursing*, 17, 93-103.
- Malecki, C.K., Demaray, M.K., & Elliott, S.N. (2000). *The child and adolescent social support scale*. DeKalb, IL: Northern Illinois University.
- Mattanah, J.F., Ayers, J.F., Brand, B.L., & Brooks, L.J. (2010). A social support intervention to ease the college transition: Exploring main effects and moderators. *Journal of College Student Development*, 51, 1, 93-108.
- Mattanah, J.F., Brooks, L.J., Brand, B.L., Quimby, J.L., & Ayers, J.F. (2012). A social support intervention and academic achievement in college: Does perceived loneliness mediate the relationship? *Journal of College Counseling*, 15, 22-36.
- 宮野祥雄. (1984). 青年期における親への同調と対立に関する研究. *心理学研究*, 55, 261-267.
- 望月直人・伊藤大幸・原田 新・野田 航・松本かおり・高柳伸哉・中島俊思・大嶽さと子・田中善大・辻井正次. (2014). 中学生の非行行動と攻撃性, 抑うつとの関連. *精神医学*, 56, 4-11.
- 森 和代・堀野 緑. (1992). 児童のソーシャルサポートに関する一研究. *教育心理学研究*, 40, 402-410.
- 村田豊久・清水亜紀・森陽次郎・大島祥子. (1996). 学校における子どものうつ病: Birlesonの小児期うつ病スケールからの検討. *最新精神医学*, 1, 131-138.
- 村山恭朗・伊藤大幸・浜田 恵・中島俊思・野田 航・片桐正敏・高柳伸哉・田中善大・辻井正次. (2015). いじめ加害・被害と内在化/外在化問題との関連性. *発達心理学研究*, 26, 13-22.
- 並川 努・谷 伊織・脇田貴文・熊谷龍一・中根 愛・野口裕之・辻井正次. (2011). Birleson自己記入式抑うつ評価尺度(DSRSC)短縮版の作成. *精神医学*, 53, 489-496.
- Nilsen, W., Karevold, E., Roysamb, E., Gustavson, K., & Mathiesen, K.S. (2013). Social skills and depressive symptoms across adolescence: Social support as a mediator in girls versus boys. *Journal of Adolescence*, 36, 11-20.
- 西 文彦. (2012). シングル・マザーの最近の状況(2010). (<http://www.stat.go.jp/training/2kenkyu/pdf/zuhyou/single4.pdf>) (2016年5月31日10時36分)
- 大嶽さと子・伊藤大幸・染木史緒・野田 航・林 陽子・中島俊思・高柳伸哉・瀬野由衣・岡田 涼・辻井正次. (2012). 一般中学生における自傷行為の経験および頻度と抑うつとの関連: 単一市内全校調査に基づく検討. *精神医学*, 54, 637-680.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二. (1993). 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果. *教育心理学研究*, 41, 302-312.
- Robbins, S., Lauver, K., Le, H., Davis, D., Langley, R., & Carlstrom, A. (2004). Do psychosocial and study skill factors predict college outcomes? A meta-analysis. *Psy-*

- chological Bulletin*, **130**, 261-288.
- Rubin, K.H., Bukowski, W., & Parker, J. (2006). Peer interactions, relationships, and groups. In N. Eisenberg, W. Damon, & R.M. Lerner (Eds.), *Handbook of Child Psychology* (6th ed., pp.571-645). Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.
- 坂井明子・山崎勝之・曾我祥子・大芦 治・島井哲志・大竹恵子. (2000). 小学生用攻撃性質問紙の作成と信頼性, 妥当性の検討. *学校保健研究*, **42**, 423-433.
- Sarason, B.R., Sarason, I.G., & Pierce, G.R. (1990). *Social support: A interactional view*. New York: John Wiley.
- 佐藤 寛・今城知子・戸ヶ崎泰子・石川信一・佐藤容子・佐藤正二. (2009). 児童の抑うつ症状に対する学級規模の認知行動療法プログラムの有効性. *教育心理学研究*, **57**, 111-123.
- 佐藤 寛・永作 稔・上村佳代・石川満佐育・本田真大・松田郁子・石川信一・坂野雄二・新井郁二郎. (2006). 一般児童における抑うつ症状の事態調査. *児童青年精神医学とその近接領域*, **47**, 57-68.
- Schaefer, C., Coyne, J.C., & Lazarus, R.S. (1981). The health related function of social support. *Journal of Behavior Medicine*, **4**, 381-406.
- Schraedley, P.K., Gotlib, I.H., & Hayward, C. (1999). Gender differences in correlates of depressive symptoms in adolescents. *Journal of Adolescent Health*, **25**, 98-108.
- 嶋田洋徳・岡安孝弘・坂野雄二. (1993). 小学生用ソーシャルサポート尺度短縮版作成の試み. *ストレス科学研究*, **8**, 1-12.
- Stice, E., Rohde, P., Gau, J., & Ochner, C. (2011). Relation of depression to perceived social support: Results from a randomized adolescent depression prevention trial. *Behaviour Research and Therapy*, **49**, 361-366.
- 高柳伸哉・伊藤大幸・大嶽さと子・野田 航・大西将史・中島俊思・望月直人・染木史緒・辻井正次. (2012a). 小中学生における欠席行動と抑うつ, 攻撃性との関連. *臨床精神医学*, **41**, 925-932.
- 高柳伸哉・伊藤大幸・岡田 涼・中島俊思・大西将史・染木史緒・野田 航・谷 伊織・林 陽子・辻井正次. (2012b). 一般中学生における自傷行為のリスク要因: 単一市内全校調査に基づく検討. *臨床精神医学*, **41**, 87-95.
- Williams, T., Connolly, J., Pepler, D., & Craig, W. (2005). Peer victimization, social support, and psychosocial adjustment of sexual minority adolescents. *Journal of Youth and Adolescence*, **34**, 471-482.
- Winefield, H.R., Delfabbro, P.H., Winefield, A.H., Plueckhahn, T., & Malvaso, C.G. (2015). Adolescent predictors of satisfaction with social support six years later: An Australian longitudinal study. *Journal of Adolescence*, **44**, 70-76.
- Yalcin, I. (2015). Relationships between well-being and social support: A meta-analysis of studies conducted in Turkey. *Turkish Journal of Psychiatry*, **26**, 21-32.
- Zimet, G.D., Dahlem, N.W., Zimet, S.G., & Farley, G.K. (1988). The multidimensional scale of perceived social support. *Journal of Personality Assessment*, **52**, 30-41.

Murayama, Yasuo (Faculty of Humanities and Sciences, Kobe Gakuin University), Ito, Hiroyuki (Research Center for Child Mental Development, Hamamatsu University School of Medicine), Ohtake, Satoko (Department of Early Childhood Education, College of Nagoya Women's University), Katagiri, Masatoshi (Hokkaido University of Education, Asahikawa Campus), Hamada, Megumi (Research Center for Child Mental Development, Hamamatsu University School of Medicine), Nakajima, Syunji (Student Support Services Room, Saga University), Uemiya, Ai (Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University), Nomura, Kazuyo (Research Center for Child Mental Development, Hamamatsu University School of Medicine), Takayanagi, Nobuya (Faculty of Human Studies, Aichi Toho University), Myougan, Mitsunori (School of Psychology, Chukyo University) & Tsujii, Masatsugu (School of Contemporary Sociology, Chukyo University). *A Cross-Sectional Study of the Effects of Social Support on the Mental Health of 4th-9th Grade Students*. THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2016, Vol.27, No.4, 395-407.

Social support is one of the factors that promotes mental health among adolescents. The current cross-sectional study of 4th-9th grade students investigated the effects of social support on mental health problems such as depression and aggression. Using general linear model and controlling for gender, age, and stressors, it was found that students who perceived more social support from peer and/or adults exhibited lower levels of depression. In addition, gender was related to associations between social support and depression - girls showed stronger associations than boys. A negative but weak effect of peer support on aggression was also notable, although we did not find the same effects for adult support on aggression. According to an analysis of relationships between gender/age and levels of social support, girls perceived more social support from peers and adults than boys. Finally, students in higher grade levels perceived more peer support and less adult support.

**[Keywords] Social support, Middle school students, Depressive symptoms, Aggression, Mental health**

2016.1.19 受稿, 2016.7.19 受理